

「教育臨床総合研究 9 2010研究」

## 新入生セミナーにおける学生の活用と成果

— ピア・サポート活動と体験学修の高まり —

Effects of Utilization of Peer-support Activities upon Mastering Experiential Learning for the First-year Students in the Freshman Seminar

青山 巧\*  
Takumi AOYAMA  
池山 圭吾\*  
Keigo IKEYAMA  
小川 巖\*\*  
Iwao OGAWA

長澤 郁夫\*  
Ikuo NAGASAWA  
福間 敏之\*  
Toshiyuki FUKUMA

### 要 旨

現在、多くの大学で、入学生のために初年次教育が行われ、その内容は、大学生活への適応や、学習スキルの会得、コミュニケーション力の向上など様々である。島根大学教育学部でも、平成17年度より新入生に対し、「入門期セミナー I」を1泊2日で実施し、当初は教育支援センター専任教員を中心に教員で研修全体を運営し、学生は補助的な役割を行ってきたが、今年度より学生スタッフを組織の中に位置づけ、より積極的に活用することにした。それに伴う新入生への教育効果と、セミナーに携わった学生スタッフ自身の学びと成果、今後の課題について考察した。

〔キーワード〕 ピア・サポート、初年次教育、学内認定資格

### I. 平成17年度～平成20年度の取組

入門期セミナー I のねらいは、図 1 にあるように①1000時間体験学修の概要について把握するガイダンス、②4年間に共に高めあいながら過ごすという仲間づくり、③研修を通して様々な人とかかわりながら高めていくコミュニケーション力やディスカッション力などを高めていくスキルアップの3つである。これらはいずれも新入生を対象として設定している。

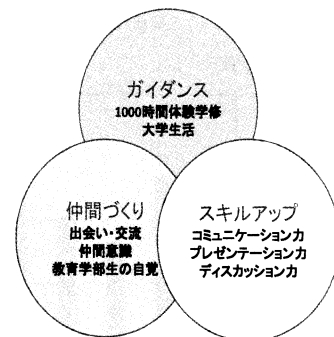


図1. 入門期セミナー I のねらい (H20まで)

\*島根大学教育学部附属教育支援センター専任基礎体験領域担当

\*\*島根大学教育学部附属教育支援センター長 (心理・発達臨床講座)

初年度の平成17年度は、学生スタッフとなりうる対象学生が2年生しかおらず、体験を十分に積み上げていないこともあり、教育支援センターの専任教員と兼任教員が中心となってセミナー運営を行った。

平成18年度は、体験をしっかりと積み上げ、資質も高まった学生が育ってきたため、基礎体験活動として学生スタッフを募集し、主にクラス担当（5クラス）として新入生の活動の支援をさせた。そのほかに、1000時間体験学修を実践することで、どのような成果があるのかを新入生により理解させるために、劇やグループディスカッションを学生スタッフ中心で運営させ、学生目線での体験の意義や活動内容を伝えることとした。その結果、前年度と比べ、柔らかい雰囲気となり、新入生がリラックスして活動に参加することができた。

平成19年度は、前年度と同じ役割で学生スタッフを活用し、更に、新入生に対し、5項目の質問内容でアンケートをとり（表1）、客観的な評価を行うこととした。

表1 入門期セミナーⅠ 1年生アンケート（質問項目）

No.	質問内容
①	入門期セミナーⅠは有意義な活動となったか
②	同級生との交流を通して新たな人間関係を結ぶことができたか
③	1000時間体験活動の全体像を理解することができたか
④	教育学部生としての意欲や自覚をもつことができたか
⑤	入門期セミナーⅠに向けて立てた目標は達成できたか

アンケートにより、教員が感じていたほど新入生の評価は高くないことが判明し、この評価を高めていくにはどのようにすればいいかを検討した結果、平成20年度にはさらに学生スタッフの活用場を増やすこととした。具体的には、これまで外部講師を招いて、接遇（礼法、座席位置、言葉遣いなど）を中心に行っていた「大学生の一般常識とマナー」の研修を、学生の実体験をもとに、体験先（学校・社会教育施設・地域の方との交流など）で最低限知っておかなければならないこと、注意しなければならないことを、クイズと演習形式に内容を変更して実施した。

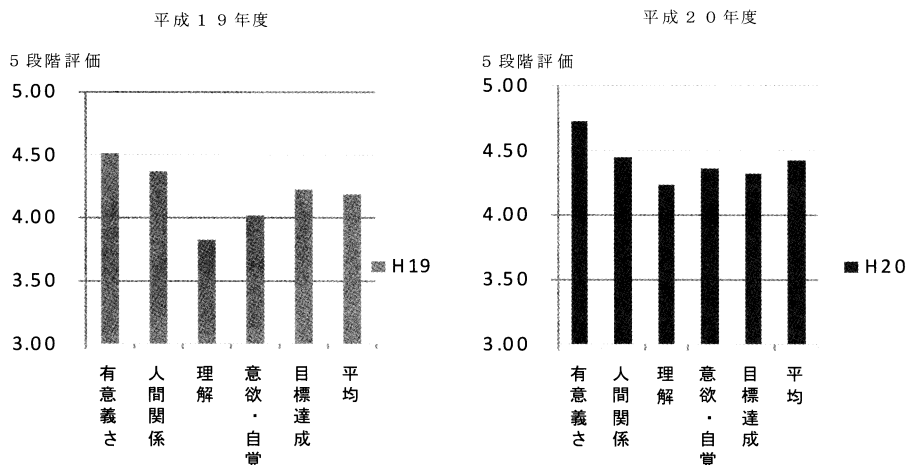


図2 入門期セミナーⅠ 新入生アンケート結果

平成19年度と平成20年度の入門期セミナーⅠ新入生アンケートの結果(図2)を比較したところ、5項目全てにおいて前年度を上回る好結果となった。最も大きな伸びを示したのが1000時間体験学修の全体像の理解であり、学生スタッフの姿そのものが、この活動が目指すものであると理解し、有意義感や活動に対する意欲や自覚も高めていったことが推察される。

そこで、平成21年度はさらに学生を効果的に活用することで、入門期セミナーⅠをより充実した内容にするよう以下の取組を行った。

## Ⅱ. 平成21年度の取組

### 1 学生の参画

平成20年度までの取組より、学生スタッフの充実が、この研修の目的達成に効果的であることが見えてきたため、今までのサポート的な立場から、一部企画を含めた、より主体的な立場で参画させることとし、学生代表者を組織した。

このことにより、入門期セミナーⅠがこれまでの新入生を対象としたねらいだけではなく、新たに、上回生が新入生に対してピア・サポート活動をしていくこともねらいに加えた活動となった。

メンバーの選出については、専門指導員のいる島根県・鳥取県の社会教育施設、熱心な指導者の下、計画的で充実した活動を行っている民間団体、教育支援センターが主催するビビットひろばから、①活動を積極的に行っている者、②事業の企画を経験したことがある者、③下学年とうまくコミュニケーションをとることができる者、という3つの条件を満たす学生をそれぞれ1名推薦してもらい、6名の学生代表者を決定した。

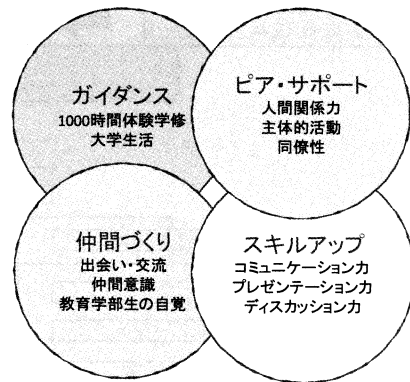


図3 平成21年度 入門期セミナーⅠのねらい

これに教育支援センター基礎専任教員2名を加えた8名で計6回の企画会議を開催し、研修内容や時間設定の検討、スケジュールリングなどを協議した(表2)。

表2 企画会議

No.	月日	内 容	備考
1	2/13	ねらいの設定・学びの視点・活動内容等	3時間
2	2/17	代表スタッフ役割分担、活動スケジュール 他	3時間
3	3/3	研修のプレゼン内容と人数決定・事前指導の持ち方 他	2時間
4	3/30	研修パートごとの進捗状況確認・今後の予定 他	2時間
5	4/7	しおりの作成(新入生・学生スタッフ)、進捗状況確認 他	2時間
6	4/14	最終確認	1時間

企画会において、学生代表者より、①新生生に対し、きめ細やかな対応をしていくには少なくとも各グループに1名の学生スタッフを置くことが必要であること、②一人一人の学生スタッフにも役割を与え、責任感と達成感をもつことができるようにしたいこと、③代表スタッフはグループ付きにはならず全体統括を行いたいことの3点が提案がされ、基礎専任会議での了承を経て、基礎体験として学生スタッフを募集し、2・3年生30名を加え、合計36名（内1名が諸事情により途中で参加を取りやめ、最終的には35名）で学生スタッフを組織し、役割分担を行った。（図4）

学生の主体性を尊重したことにより、企画会議の他にも、学生代表者会を随時開催し、原案作成や情報交換、準備状況の確認などを行うと共に、研修担当ごとに3～6回の打ち合わせや準備を行うなど、これまでよりも主体的に活動する学生が増え、準備段階においては例年以上の質の高い状態で当日を迎えることとなった。

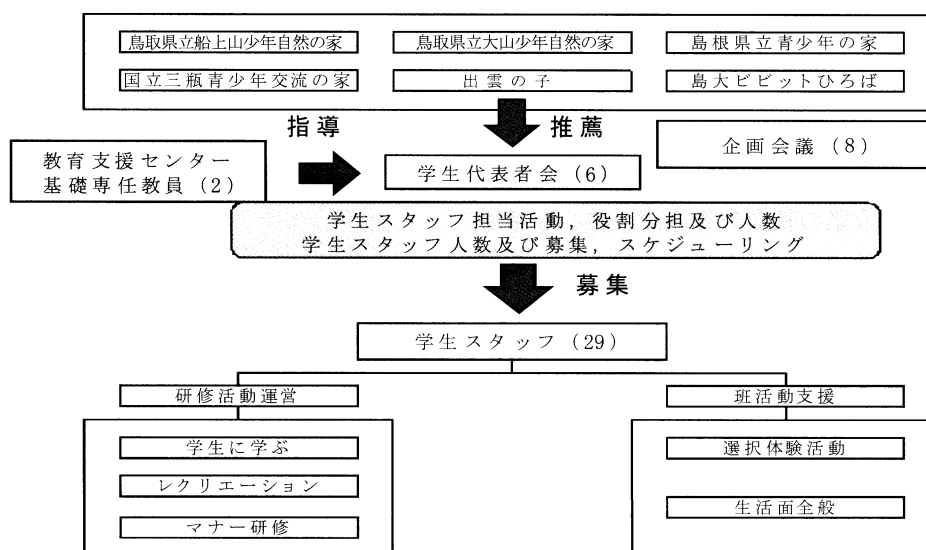


図4 学生スタッフの組織及び役割

## 2 活動の実際

表3 平成21年度入門期セミナーⅠ 研修内容

月日	研修	時間	内 容	担当
4 / 18	1	10:00~12:00	「1000時間体験学修」における教育体験の意義	教員
	2	13:30~15:30	先輩に学ぶ（劇・班でのディスカッション）	学生
	3	15:30~17:00	出会いの場の演出と仲間づくりについて	学生
	4	19:00~20:30	大学生の一般常識とマナー	学生
4 / 19	5	9:00~11:30	選択体験活動（ハイキング、ニュースポーツ他）	教員
	6	13:00~14:00	活動の振り返り（活動記録票の記入）	教員



研修 2：先輩に学ぶ（劇）



研修 2：先輩に学ぶ（グループディスカッション）



研修 3：出会いの場の演出と仲間づくり



研修 4：大学生の一般常識とマナー

研修 2 では、前半は研修 1 で教員が説明した概要を、学生が実際の活動体験をもとにして具体的なポイントを挙げながら劇化して説明し、後半はグループ（新入生 6～7 名に学生スタッフ 1 名）単位で、よりきめ細やかな説明する共に、新入生からの質問に答えるという活動を行った。研修担当者から事前にアイスブレイクをして雰囲気や和らげてから活動に入るよう指示が出されていたり、質問に答えるために一人一人の学生スタッフが自分のこれまでの活動を振り返ったり、1000 時間体験学修の意義や目的を再確認したりするなど、きちんと準備を行った上で参加している姿が見受けられた。

研修 3 では、これまではレクリエーション協会から講師を派遣してもらい行っていたが、大学生を対象とした活動実績が少ないため、新入生の満足度は必ずしも高くないという実態があったことと、学生スタッフの中に社会教育施設での体験活動を通してレクリエーション・インストラクターの資格を有する者も複数名おり、200 名近い参加者に対する貴重な実践の場の提供ということから、今年度より学生スタッフを講師として研修を行った。

研修 4 では、学生が教員や体験受入先と最も多く使う連絡ツールである、携帯電話のメールの正しい使い方とあいさつやお辞儀の仕方について、グループ単位で、クイズ→講義→演習といった流れで実践を行った。高校時代には目上の方にメールを打つという習慣はほとんどないために、自分たちの常識とのギャップに驚く新入生が多かった。研修担当者の例文が効果的であったことが推察される。

### Ⅲ. まとめ

#### 1 成果

##### (1) 新入生

新入生については、図5にあるとおり、「1000時間体験学修の理解」「仲間づくり」「平均値」については前年度を上回り、残りの項目についても前年度を下回りはしたが、高い水準にあることが分かる。

記述式の感想を分析したところ、大きく3つに分類することができた。以下に代表的な感想を紹介する。

##### 1) 課題発見

学生スタッフとして参加して下さった先輩方の姿を自分に置き換えて「私にこういうことができるのだろうか」と考えたりもしました。先輩方は人前でも、おどおどすることなく、堂々としていて、その上、話すべき言葉も次々に出ていて、本当にすごいなと思いました。私の課題の1つはまさにこれです。1年、2年と時が経つにつれてこの力を養っていきたいと感じました。

##### 2) 学生スタッフへの憧れ

来年、またはその次の年などに、今度は僕が先輩という立場でこのセミナーに参加することになった時に、先輩のような振る舞いなどできるのかが少し不安になりましたが、この2日間で体験・実感した先輩方の活動に積極的に取り組む姿勢や態度を少しずつ思い出し、新入生への対応などに力を入れ、来年の新入生の方々にも、このセミナーで僕が感じ、感激したことを感じ取ってもらえるように努力していこうと思いました。

##### 3) 教師への決意

今回のセミナーで、改めて自分が「教育」の道に進んでいくということを意識しました。今まで教師という立場に立って、教師の気持ちについて考えたことのなかった私は、教師によって、生徒を生かすことも殺すこともできるのだと感じ、ある意味怖いものであると感じました。一人でも多くの子どもの可能性を生かすことのできる教師になれるよう、4年間でできるだけのことをやりたいと思います。

##### (2) 学生スタッフ

学生スタッフについても、記述式の感想を分類すると、①自己成長に対する喜び（人前で話することができるようになった、指示を出せるようになった、全体を把握して行動することができるようになったなど）、②活動意欲の高まり（今回の活動で見つけた課題を克服したい、教えることによって新たな課題が見つかった、自分に足りない部分を意識して今後の活動をしていきたいなど）、③仲間への感謝（今までと違ったメンバーと活動することでとても刺激のあ

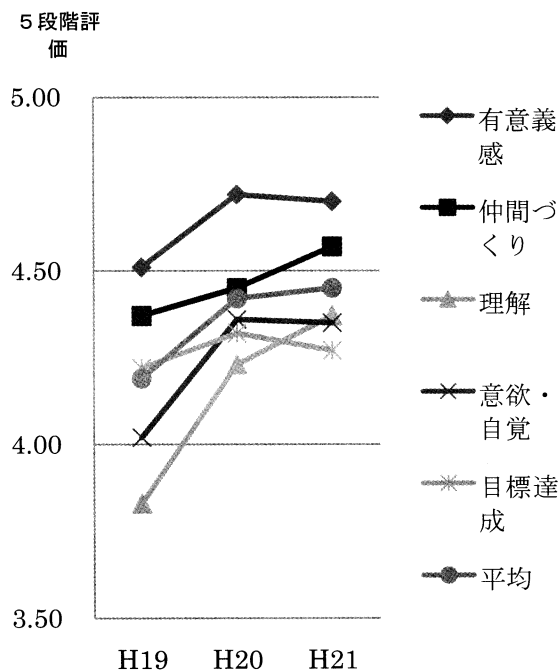


図5 新入生アンケート結果の推移

る活動となった、2ヶ月間準備を重ね、苦勞をした分、スタッフのまとまりができたなど)の3つに分類できる。

多様なピア・サポート活動が継続、発展していくための必要な条件として春日井(2009)<sup>1)</sup>は、第一には、サポーターの善意に基づく主体的な活動であること。第二には、支援活動の目的、内容などを明確にして、共有していくこと。第三には、支援活動に必要な研修を受けて、目的に即したスキルを獲得していくこと。第四には、サポーター同士の楽しい交流を通して、つながりや同僚性を形成していくこと。第五には、サポーターの自己評価や相互評価を共有しながら、葛藤し成長できる居場所を作っていくこと、第六には、援助の対象者からサポーターへのフィードバックを共有しながら、双方の成長を認め合える相互関係を作っていくこと。第七には、困難に遭遇した時の報告や相談先を明確にしておくことである。としている。

今回の活動は、その全てにあてはまったものであったので、学生スタッフにとって充実した活動となりうることができたとと言える。

## 2 課題

本学部では平成22年度入試からAO入試を導入するなど、大幅な入試制度の変更を行った。これまで以上に新入生の個人差(教職志向、学力、学部教育への期待等)が大きくなることが予想され、よりきめ細やかな支援が求められ、今年度以上に学生スタッフを活用していかなければならないことも危惧される。

そのためには、日常における1000時間体験学修に意欲的に参加させ、自らの資質とスキルの向上を目指すよう学生の意識改革を図りながら、その学生を入門期セミナーのスタッフとして参加したいという思いをもたせていくことが成功の鍵となる。

あわせて、平成20年度より導入した学内認定資格制度の「体験学修ピア・サポート」の資格取得にチャレンジするよう積極的に働きかけ、自分の活動の成果が可視化できることで体験学修へのモチベーションを挙げていくと言った支援も必要になってくるように思う。

## 参考・引用文献

- 1) 春日井敏之 2009 大学におけるピア・サポート活動 ― 新入生支援、インターンシップ、授業の試み 「現代のエスプリ502 ピア・サポート 子どもとつくる活力のある学校」ぎょうせい 130-139